サンタクロースは本当にいるのでしょうか

1897年９月21日、ニューヨークのサン新聞に掲載された、
ニューヨークの８歳の少女バージニア・オハンロンの「サンタクロースは本当にいるんでしょうか？」
という手紙に答えて、サン新聞のフランシス・Ｐ・チャーチ記者が書いた有名な社説があります。

★★★★★

バージニア、お答えします。
サンタクロースなんていないんだという、あなたのお友だちは、まちがっています。（中略）

サンタクロースがいるというのは、けっしてうそではありません。
この世の中に、愛や、人への思いやりや、まごころがあるのと同じように、サンタクロースも確かにいるのです。
あなたもわかっているでしょう。
世界に満ちあふれている愛やまごころこそ、あなたの毎日の生活を、美しく、楽しくしているものなのだということを。
もしもサンタクロースがいなかったなら、この世の中はどんなに暗く、さびしいことでしょう！（中略）

サンタクロースがいなければ、人生の苦しみをやわらげてくれる、子どもらしい信頼も、詩も、ロマンスもなくなってしまうでしょうし、
わたしたち人間の味わうよろこびは、ただ目に見えるもの、手で触るもの、感じるものだけになってしまうでしょう。（中略）

サンタクロースがいない、ですって！　サンタクロースが信じられないというのは、妖精が信じられないのと同じです。中略）

サンタクロースを見た人はいません。けれども、それは、サンタクロースがいないという証明にはならないのです。
この世界で一番確かなこと、それは子どもの目にも、おとなの目にも、見えないものなのですから。
バージニア、あなたは、妖精が芝生で踊っているのを、見たことがありますか？
もちろん、ないでしょう。
だからといって、妖精なんて、ありもしないでたらめだなんてことにはなりません。
この世の中にある見えないもの、見ることができないものが、なにからなにまで、人が頭の中でつくり出し、
想像したものだなどということは、けっしてないのです。（中略）

……目に見えない世界をおおいかくしている幕は、どんな力の強い人にも、
いいえ、世界中の力持ちがよってたかっても、引き裂くことはできません。
ただ、信頼と、想像力と、詩と、愛と、ロマンスだけが、そのカーテンをいっときひきのけて、
幕のむこうの。たとえようもなくうつくしく、輝かしいものを見せてくれるのです。
そのようにうつくしく、輝かしいもの、それは、人間のつくったでたらめでしょうか？
いいえ、バージニア、それほど確かな、それほど変わらないものは、この世には、他にないのですよ。（中略）

サンタクロースがいない、ですって！
とんでもない！うれしいことに、サンタクロースはちゃんといます。それどころか、いつまでも死なないでしょう。
一千年のちまでも、百万年のちまでも、サンタクロースは、子どもたちの心を、いまと変わらず、喜ばせてくれることでしょう。

＊中村妙子氏訳『サンタクロースっているんでしょうか？』偕成社刊より引用（一部原文仮名を漢字に訂正）

★★★★★

シェフは、チョコレートの工房で、カカオの妖精を見たことがあるみたいです。
若い頃、クリスマスイブに夜中まで仕事をしていたときに、どうもサンタクロースも見たことがあるようなのです。
でも、このことは秘密です。シェフは、妖精やサンタクロースに会えた感動を
大事に心の奥にしまってあって、その感動を、チョコレートやケーキに、そっと入れているそうです。
これも大事な秘密なので、内緒にしておいてください。
どうぞ素敵なクリスマスをお過ごしください。

Joyeux Noël ！

Chocolatier La Pierre Blanche